標注

榮花物語抄

六

標註榮花物語抄巻六

小中村義象
関根正直　標註

卅一　殿上花見

まことや殿上の人々もはな見開白殿もいらんしけ（頼通）るに、齋院（選子）より、

のこりなくたつぬなれとも志めのうちれをかハ花ふもあらぬなりけり」。ときこえさせ給へりけれバ、

春宮大夫（頼宗）の返し、

風をいたみまつ枝を山ゑ」をたつねつる志めゆふ花はちらじとれもひて」。このうたれ返しハかくこそ集にハ。

まことや殿上の云々　巻の名この句ふまりて起れりこれハ長元四年の春なり

のこりなく云々　この賜答の歌云景集ニハありそれハちなりけりとある。つしふつねつるハさつねいるとあり

民部卿の歌後拾遺一ふあり。それふも。ひすられぬふ。ぷりね。あられぬざり。ぷりとあり

のこりなくありぬる妻ふちりぬべき花ばかりを
バ祢たまさらなん」と聞えさせ給へり。民部卿(斉信)閑白殿
ふ、
いふ〜へれ老えしく人いたつね〜をたいいはるふ
もわすられにけり」入道殿(御堂)などまつさそひきこえさ
せ給ひけるを、たゞしけるなるべし。これハ法住寺(為光)の
おとゞの二良なり。とのゝ(頼通)ゐ殿し。
たつ祢んとれもふこいろもいふ〜へれはるにハ
あらぬ心地こそすれ」ときこえさせ給ひけり。くて長元四
年九月廿五日、女院(上東)住よし石清水にまうでさせ給ふ。こ
れにさぶらふ人ハ、かひ〜しきすにぞれもひける。午
のときばかりに、いでさせ給ふ。さきにこてぐらこと〜

女院住よし〜石清水云々　この子扶来略記、百錬抄等ゐも見ゆ

しくてさぶらはす。ことゝりぬなどもれ見る人々う
れしくて、ことゝくなく見る程ふ院の人々、濟政朝臣、行
任朝臣、章任、頼國、範國惟任、定任、能通、やすのりむ祢ふ
ゐのりすけ、よしすけなりすけ、これならぬも、いとれ
ゐくさぶらふ。たれもくまばゆきまで裝束(さうそき)たり。殿上
人隆國の頭中將、經輔の右中辨(左大弁)、實基の中將、さねやす
の右京大夫、師良の兵部大輔、行經の少將、經季の藏人
少將、上達部春宮大夫頼宗、權大納言長家、左衛門督師
房右衛門督經道、右兵衛督朝任、三位中將兼頼、あるハ
直衣うへのきぬ、あまたハ、のりきぬ裝束、いひやるか
たゝきに、おり物うちもの、にしきぬひものなど、心々
にめてたくをゝしくゆる程に濃改守頼國朝臣れ

直衣　なほしどよむうへのきぬハ袍なゝりきぬハ狩衣ゝ

つかうまつりたる、御車に奉りて、れはします。左右のそはに、かゝゝの月をいだして、ゑかきいとしきをつくしたり。蘇芳のかり衣、はかま、れふじいろのあこめきたるめしつけといふもの、十人つきたり。車副あをいろのかりきぬ、はかまに、やまぶきのあこめをきてさぶらふ。いだし車みつ、東宮の大夫、長家權大納言、左衛師房門督、奉り給へり。思ひくなるはしとゝ車のすきとゝりたるなり。一れ車にハ、あまゝ人、雜尼、雜令婦、左近令婦、少將あまきゝ二の車にハ侍從のすけ、ゑちごの弁のめのと、太輔平少將、むさし、三の車にハ江宰相、みの小輔、兵衛内侍、御車のちりにハ宣旨、三位ぞさぶらひける。宣旨ハ源大納言時中の御むすめ、三位ハ内の侍後一条のめのと

あこめ　袖あり下着也

むしどこゝなし　車なり　車部

の大貳の三位なり。あうまうりての名ハかうこゝのほかにそぞありける。さきど御くるまのちりにもさぶらひ給ふ。それにより、あしきことにもあらぬなむあまいうすにび、さての人ハこなくれおゐをなむきたりしひごとにぞかへさせ給ふ。このいだしくるまの後ふかりきぬすがたの人、いとたはからで、殿頼通かくるまにのりて、さぶらはせ給ふ。内大臣教通殿うちつゝきの同しさまにて、まゐらせ給ふ。賀茂河ちりといふ所にて、ゐふねふたてまつる。船ハ丹波守章任ぞつかうまつらせたりける。唐やうたの船に、こまゐたをたてゝ、かゞこゝぢん、ちたんなどを、さまゝをかしきさまにつくしたり。船さす人ハ人、ろうさうのかりきぬはかま

章任　大貳三位の子

こまゐたをこゝ　高麗形こちんハ沈さんハ紫檀あり

ろうさう　緑衫といふことをふこゝ

うら車　唐車あり

めていへるこ六位の袍ありこの殿伊勢物語ふもとゆ

に、かねして繪をゝきたるに、蘇芳れあこめをきたり。つきゝ女房のふ紙、あたりゝにたとらゞといどこたれバ、こゝろゝ見えて、いとをゝし。水のうへハさらぬだにあるに、いとめでたくをゝしうこゆ。いぬるれときばゝりに、山崎といふところにつゝせ給ひて、ものゝふど冬らせてのちに、いはゝ水にのぼらせ給ふ。とりゐれ程にて、御車にたてまつりて、殿上人、てごとに火をともして、御くるまにそひたるゆのげともの、山かくれ、いとをゝしうこゆ。まづ御はらへ、つぎにぬてぐら奉らせ給ふ。つぎに舞がく物の袴どもつ袴よりもげにきこゆ。あかつきさに、御經供養ゐたてまつり給ふ。明尊僧都御導師にて、さぶらふ。そのゝち、ふ袴にか

水の上ハ云〻たゞても水上ゐ雪きふゝる遊船つらねさるハ甚おもしろしゝ

つねよりもけふけふゐまさりてのさゝ

こゝ〻一本のこゝろくの方ようるへし別〻〻

へらせ給ふ。廿六日になりて、こぎくたらせ給程に、人人のすゞたとも思ひ〻にかへて、水のれも〻ゝこころなゝくうきたるほどに、ふねにこしくなるたゐといふものをゝしくつくりて、やはたの別當、元命といふ者ゐくたものすゐてまゐらせたり。ゐさへをかしく見ゆ。ゝしま江といふ所すぎさせ給ふほどに、内れ御つかひに、すけふされ中將、後朱雀東宮のゐつゝひ、よしよりの少將、まゐりあひたり。此程にゐふ袴とゞめて、ものなど冬らせてのちに、ゐ返す給ひくまゐる。いつかたにつけてもめでたし。心のゝ水にうつりて、かゝることをまだゝしま江の浪にうちあふすいあらじゝ〻、をゝしくゝゆる程に、よしよりれ少將ハ、ゐかへりふ

資房中納言資平の一男

良頼中納言隆家の一男

しとてやゞてひとともに参る。くだらせ給ふほどに、えぐちといふ所ふなりておそびとも、かさに月をいだしらてんまき繪さまくに、たとらじまけじとしてまゐりたり。こゑともあしべ打よする浪のこゑも、江くちのいふべきかさなくこそみえしう。せ七日つのくにゝつゝせ給ひて、やゞて、くま河につゝせ給ふ。みちのはしへれ石のれもひくに、そむきたるもをうし。せ八日のつとめてずいこよしにつゝせ給ふ。内れ大殿ふど、こなひ馬にて、えもいはぬ装束たてまつりてさぶらはせ給ふ。ひはらへ、やしろにまうでさせ給程、左右にものゝねとも、ふきたてたる、松風きんをちらべたる心ちしてをうし。きのうこよしむ絲、えもいはぬ

こゑともこれハ遊女の係累なるべし

御かり屋をとまうけてさぶらはせ。御てぐらたてまつらせ給ふ程に、内れ一ちひにさたよしれ少将、こゝのへをいでゝ河尻のさほさしてまゐりけんこちたとゐこの草のまくらもをかしうぞ思ひやらるゝ。この程に、ひ經供養せさせたまふ。定基僧都ぞ講師にさぶらひける。ことはてゝ、これより、やがて天王寺に参らせ給ふ。人々のすゞたありさま、みやこはふまて、人めもつゝまぬ、たびのもうたなきバ、いとゞえもいはずこゆ。馬のけしきとも、波のこきハ、うちふむもことにこゆ。國れ人々あつまり、ところもなく見るをりゝろゝるもの見るみやこの人だに、ところふうりしに、まして、ことゝりにこゆる程に、うちまゞりてきけバ、

さゝす　宣長ノ經房の子

ここに出さる老人のさま見るべしこと

どしたいたる人かゝだうちのごひそみちのくにとほちのさとなとふすまひせましうバかゝるゝゆきにあはましやこの年ころハふにはのうらはなにともたゝえずなゝらの橋のながらへても何にかはと思ひしにけふこそさはとし頃おくりしあしのやどり志ばのとびらもげにすゝよしにつくりてけりとうれしつふでのめでたきことのためしにハさはこれをこそひかめとだもひいふをきくもをゝしげにとれぼゆきしのまゝくるゝたてるわもちとせまでかゝるゝをなゝ風志つかに吹つたへ奉らなむとたぼゆとりのときばゝりに天王寺の西の大門にいくるまとゞめてなゝれきはふぎにし日のいりゆくを

おゝ立る　丞立る わゝ

ふごりかき云々この歌部類本に九ふあり

りしもをゝませ給ふなにの契りにゝ残りてとめてたくこそつぎに御経供養せさせたまふ教園僧都講師つかうまつりけりこの程に東宮の御つゝひに大進たかすけまゐりたり廿九日にかへられ給ふつゐでにかめ井の水のもとにゝらせ給ひて御覧する程にれぼしめしける

東門院

ふごりなきかめ井のみつをむすびあげてこゝろのちりをすゝぎつるかな

とれゐせられたりけんも、げにいとをゝしくこそかへらせ給はまこちふれもひくに競馬などするさへをゝし難波といふ所にて御はらへあり判官代むゐなゝ御つかひなり御船にたてまつりて河尻につかせ給ひて十月一日午の時

ものぬぎなどとは衣を脱て禮頭せしをいふ

この夏よ歌あり略す

よるのころも云々寢衣をうらうへなしこふ着て出てゐるさまよ

ぞりに、雨ふりてかミなれバ、こをハ神のよろこばせ給ふといふ人々あまたあり。二日あまの河と云ふ所にとゞまらせ給ひて、あそびどもめして、ものどもたまはす。人々みな物ぬぎなどす。日うちくるゝほどに歌よませ給ふ。うしのときばかりに、御ふゑふりたりさせ給ひて、のぼらせ給へバ、そやこにハ曉方にたをしまゝつゝせ給へバ、人の家ともにたどろきてはじめなごりを、日頃わすれかたくたもひけをバ、かどあけさゝぎこしあゝつきのあさゞほ、よるのころもなどかへさまなどにて、やがてある人などありしこそをゝかりしゝ。日比れありさま浪のうへあしまをわけしほどを思いでつゝ、わかき人などはこひ

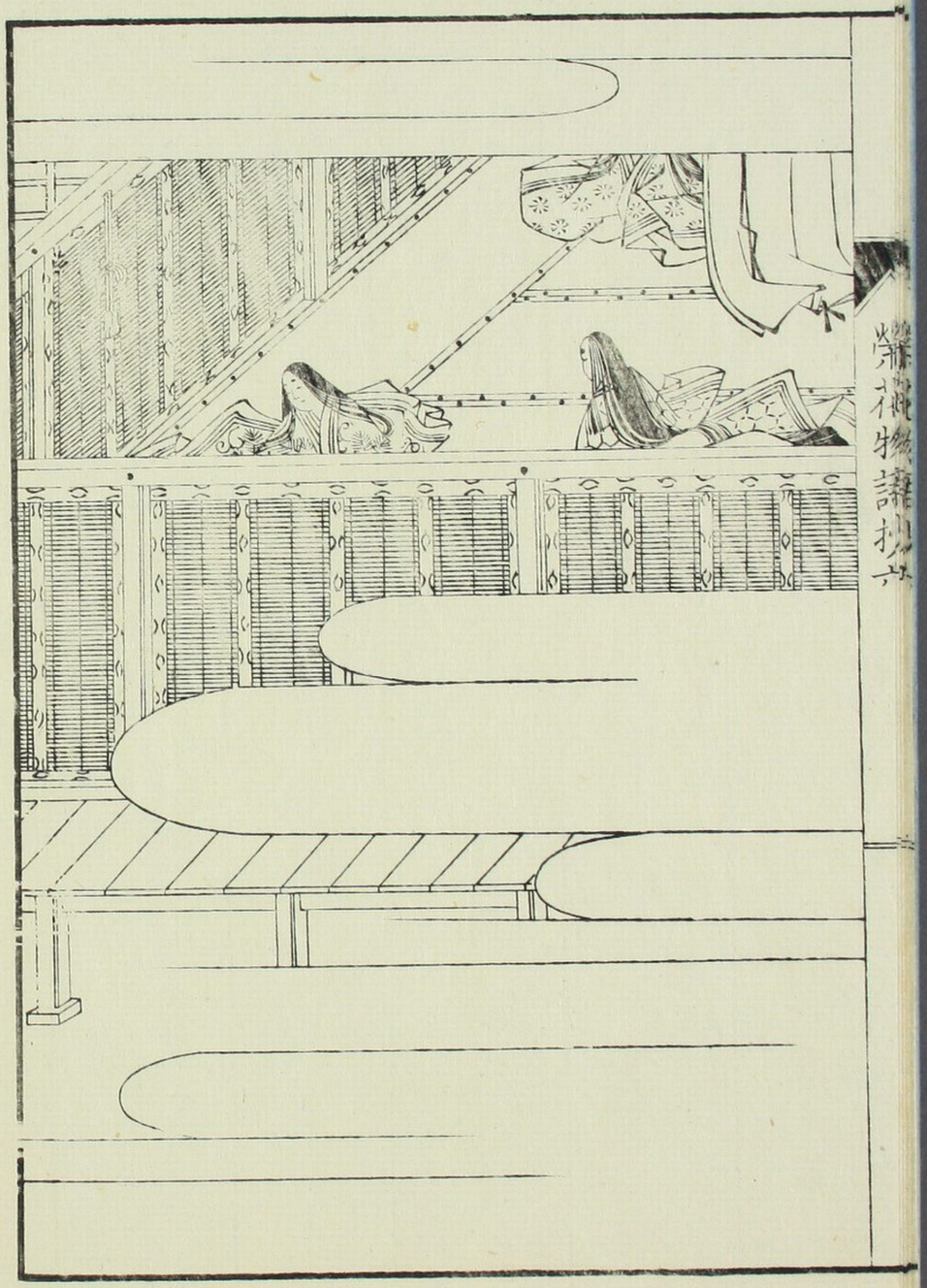
この間ふ加賀茂祭上東門院入内中宮藤子行啓奇院の事ちれとも略せり

まりけハ鞠を蹴ること

長元六年

あへり。この程ハこれふて世の中すぎぬ。十月ころもかゑ、五節臨時れ祭などいひて、こゝろのとゝならてすきぬ。一品宮（章子）ハ、あけくれめかれず、かしづき奉らせ給ひて、御對面ふどある度しとあれど、一品にならせ給ひぬるハかたじけふし。御をづらなどゆはせ給うて。のぼらせたまはんとてとゝまりぬ。おべてならずいこゞくもてかしつき聞えさせ給ふ。殿上人朝夕に、まゐりまゐで、まりけ、ふゝ射などをゝしくあそびあへり。子れ日に、やますげをてまさぐりにして權亮か孫ふさ、

たぼつゝなけふハ孫の日をやますげれひきたゞへてもいのりつるのな。」といへバ、出羽雜、



いまよりハまつをもれきてやますげれながきためしにひきやくらゞん。」などいひかはすほどもをうし。殿上人などまゐりて、ふゐいおどするに、たいふ、伊勢

けふよりハ孫の日れれとあつさゆゑもろやにちよをかけてひかなむ。」かへしわすれにけり。としかへりぬ。きいのことさゝがしくてすぎぬ。

長元七年

㊀歌合

長元八年五月、卅講はてゝ、開白どの歌合せさせ給ふ。殿上の人々、わらたせ給ふ。左方ハ藏人頭、經輔濟政資業、良頼、春宮亮良經の左馬頭、行經少將、中宮大進義通、經季少將、經長雜、經成少納言、信長侍從、範國資任、憲房、經尹、實總、藏人ハ俊經、季通、貞章なり。右かたハ、實經朝臣、兼房、中宮亮資通の弁、俊家の中將、通基の四位侍從、師經内藏頭、行任、舉周、爲善、國成、良宗の右衛門佐、資綱少將、經家少納言、經季左衛門佐、三河守經信、定季、信濃權守、藏人ハ茂清、家任、頼家とこゝ、せ給ひて、題ハことゝころもとむべきからに、たゞこのまちかくゝゆることをこそはとて、月、五月雨、池水、昌蒲、螢火、曜麥、郭公、照射、これのゝやほかの思やるゝハあらめとて、祝意とゝろ、せ給て、各くかたゝに、左にハ經輔頭弁、右にハ良宗藏人右衛門佐にぞめしてたまはせたりし。頭弁ハ民部卿れ服にてこもりゐ給へきバなるべし。さまゝにいどゝたる程に、れなじ月の九日に、殿上のわらはをかたわらたせ給へり。左にハ

扶桑略記云長元八年五月十六日左大臣於高陽院第有歌合以祭主輔親卿為判者

殿のわらはきみ（通房）君、行任らの子、のりくにがの子、のりたうがの子、右にいいへつねかの子、のりなら〳〵子、よりくふらこ、わかたせ給へり。これハ御賀にまひせし人のこなり。右すこしことたがひたるやうなり。十二日になりて、上達部のさるべく、わかやうなるを、わかたせ給ひたり。左ハ、兼頼の宰相中将、公成れ右兵衛督、こぎにハ、顯基れ宰相中将、隆國の右兵衛督との給をす。いつちら、いかゞと思ひ申。さるのときばらりに、左のかたの人々、色々のうすものを、屋かたにはりて、かぬのとこなつのはゝをたる船、ふたつにのりて、ふえけしきばらりふきすさびて、伊勢の海うたひて、いけの心にまらせて、さわさしてまるるをこれバ、ふたあるのなゝし、

いろ〳〵のうへもの色々の羅あり

ふゝあゐ二藍ふて深めたなり

さしぬきふくれなるの、うちたるたろきひとへをぞきたる。藏人ハ、ぢり物のさしぬき、あをいろの水に、うつりたるらげをかし。いけのうへれ、そりをしにふ祢をよする程に上達部二人、たちてむらひあひて、さるべき人々、すこしばらりをぐしてまるりゐたる。のちに藏人俊經、ふたあゐれうつくしきとりて、ひろげしくをこれバ、むらさきのふせんれうに、あをきざうがんをつけて、伊勢海と云、さいばらをあしきに、ぬひたり。かゝこれ水らゐのすなごしたるすだまを、すゑみち、さだあきらとりて、うちしきのうへにふす。かねれすにいこほり物に志たる、か祢の机に、すゑたり。らずさしのものハ、かねのすはまに沈れいしたてゝ、かゞこ

あしで蓮をうゑとりふ風流ののきうさありしあり もゝまゝ、海濱あり きけそこ 透明ふり

いし 持子あり あるもゝまそらう

きき　前駆あり

のこつなど云たるうへに、をの尾れ松をうゑうつす
を、ゐずに云さう。わらハかずさしとれぞしくてゐる
り。かゝる程に、右人まちゐくなる程に、車のたこつゝ
け、ききをまことに、山河のたきつせれおとよりもけ
にのゝゐりてまゐる。ことさらにするときこえてを
かし。れとらずせんと思ひしことれたがひぬるゞく
ちをしきなるべし。まづさるべき人々ハ、俊家の中将、
とこなつの、いだしうちきふたあるのなゑし、あをい
ろのおりもの、さしぬき、通基の四位侍従、ふたあゐ
のなゑし、あをいろれ織物のさしぬき、こきうちぎぬ、
實綱の少将、ふたあゐれ直衣、さしぬきに、あをきれり
ものゝひとへ、藏人二人、おり物のさしぬき、青色にて

心にくき　奥ゆゝしくゐりたきこゝろなりこの詞とこゝろ〳〵ふあり

さいて　裂まあて裂細布也

か孫のすはまに、沈のませゆひたる、かねのとこなつ
のくさむらをかきたり。歌ハなにゝゐきたるぞなど
心にくきほどふるやう花にてふれいこじうをゐし
きが、十ばゐりゐたるなりけり。かずさしれ物ゝうち
のれまへとたぼしくて、たけのたいよりぬきいでた
るを、かぐにハ云たり。かゝるの水沉れいし立てゝさま
ざまのくさを云たくさにて、色々のさいでしてつく
りたるも、ことさらとゝゐせバをゐし。かくて藏人と
りて、かずさしにハゐたり。左右いどゝて、かた分きけ
るゐどに、とのゝ若君左により給ふにけきバゝいどま
んも中々なりとて、右ハたゞたいらゐあり。左れ講師、
左の中辯つねなゐ、右れかうし右中辯季通参りてゐ

たり。三位すけちうをぞ、この歌ばかちまつけ定むべき人にてめしたる。歌ばよしあしい、いかゞさだむらん

補親　大中臣能宣の男なり

神さびてゑゝ　補　神さびてゐたる、わたもゝちけしきゑにかきたる心ちして、これ、ゆりほうハたれをかたゝ見えたり。くらうなれバ、火などゝもたて、左行経の少将ゆりて、すきゑをあけて、やり物のほ祢に、ざうがんのかゝをはりて、題の心をさまゝにかきたる扇をひとつゝとりて、かうし経長れへんにとらす。歌ハ内のロめのと、宰相れ内侍のすけかきたり。右にハ兼房の右衛門佐、蝶ゐたるとこゝつのえだををりてすけゝちにとらす。かた人ちゝくまゐりゝてゐたり。左ハ北、右ハみゝゝにぞありける。かうする程かぎりなくをゝし。夜やう

やうふけて月のすゝのぼりたるほど、いけのこゝろきよさも、歌れ題の心さへゝうなひてをゝし。とのゝ女房の装束ハ、うすものをなでしこにて、色々にてひねりかさ祢たり。うたハうるさきやうに、人れ思へれど、かくいひゝて、かゝざらんもほいなけれバなん。

一番左勝　四位少将行経

月

夏の夜もすゞしかりけり月ゝげハにはゝろたへれたもと見えつゝ

右　赤染衛門

やとからぞ月の光もまさりけるよのくもりなくすめバなりけり

二番左勝　　相撲

五月雨　　東宮學士茂忠朝臣（義イ）

五月雨に（わイ）水のこゝまきのまこも草かりほすひまも
あらじとぞたもふ

右

五月雨のそらをなゞむるのどけさいちこを垂たるこゝちこそすれ

三番左　　弐部大輔資業朝臣

池

千代をゝてすむべきこつをせきれつゝ池のこゝろにまゝせたるゝな

右　　少納言經家

としをへてすむべき君がやどなれバいけの水さへにごらさりけり

せきるゝわろしとて右勝

四番左　　葛蒲　　右馬良頼朝臣（左イ）

あやめ草尋てぞひくまこもかるゝとのわたりれふゝきぬまゝで

右　　東宮大夫頼宗

むかしゝりつきせぬものハあやめ草沐きゝとのにひけハなりけり

五番左勝　　曜麥　　四條大納言定頼（中イ）

床夏のにほへるにはゝからくにゝれるにしき
もたちこじとぞ思ふ　　右　　赤染

にはのたもふからのにしきをしく物いなる床な
つの花にざりける　　猶床なつといふことわろしとて右まけぬ

六番左持　　郭公　　茂忠朝臣

なかぬよもなくにもさらに郭公まつとてやすき
いやゝ祢らるゝ　　右　　赤染

夜もすがらまちつるものを郭公又とゝもなるこゑ

ぎぬなるかな

七番左勝　　螢火　　右馬良經朝臣

さゝ水にそらなるほしれうつるかとこゝにいよ
はの螢なりけり　　右　　赤染

名ふたてる五月のやゝもかゝりけりさはの螢の
まがふひかりふ

八番左勝　　照射　　弐部少輔公資

五月やゝあまつ星だにみえぬ夜にともしのみこ
そやまにみえけ

右　赤染

さつきやみほぐしにかくる燈火のうしろめたく
やしかハ見るらん

右歌よしとて、輔親そなたよ心ある程よ、左人々と
もしびといへれいの人のやどにともすをこそいへ。
さらよこのゝらぶと申ふ、ふるき歌にともす火はと
よゝたり。さらねど、ほぐしにかくといひつれバ、こ
とゝもを火をさ云やうなしと申せバ輔親もまこ
とよ歌ハ心ばへあり、をうしけきどゝばゝりにて
もしかいはれぬれバとて、右まくるになも。

九番左　祝　能因法師

きゝゝ世ハをゝら雪かゝるつくば彩のゝ彩のつゞ
きの海となるまて

右勝　すけふさの少将

思ひやれやそうち人のきゝがためひとつこゝろ
にいのるいのりを

左うた山の海となりうゝの山となりけんも、あ
いふし。海ハうゝ山ハやまにてあらむこそよろ
らめとて。

十番左　戀　能因法師

くろかゝの色もかをらぬこひすとてつゝをかき人
にわれぞたいぬる

すけふさ　一本ホ
ハ伊勢大輔とあり

三人家

頼宗能信長

右勝

春宮大夫頼宗

あふまでとせめていのちのをしけきぞこひこそ人ぢいのりなりけり」。夜いとじくふけゆき、月のかげすゞしく物のどやかにとなされて、今もむかしもかうるたぐひあらんやとたぼゆるほどに、これかもさるべきうたとも詠して、御あそびあるに、ふえたけのよふくる程もいとをかしきに、左うたかちわざと覚しくて、沉たんのかひすりかゝとのみづやりなどたたる。わりこども参らせたり。すけちかにハ、裝束ひとぐかづけさせ給ふ。つぎに上達部のいで給ふ程に、内教通大臣殿、大納言三人よ、御馬たてまつらせ給ふ。つぬのことなどゝこよひハつ祢ふりもまさりてをかしくみゆるふことれありさまちよをもそへまほしうりし夜のあけゆきしこそあかずわりなかりしか。

長元九年

㊀きるハわびしと歎く女房

後一条内北殿なやゝ、目をへてたもらせ給ひて、四月十五日ばかりより、日ごゝをにたえいらせ給ふ。女院上東門中宮威子涙にくれてたはします。三位たちも、いとむつましき人なれバ、ひとつにてだはします。つひよ四月十七日のゆふかたゝうせさせ給ひぬるバふゝなゞら院も宮もたなゞしさまにてたはしませバ、きこえさせわつらひて、かくてのゝハいかゞとて御せうとの殿はらぞしもの御つぼ祢に御ぞにおしくゝまて、ゐてたろしたてまつらせ給ふ。いまゝばしだにのどかよ見たてま

三位大貳三位かるべし

扶桑略記帝王編年記ふよるなる年廿九なり

つらせ給ふべきを、ゐ心にもあらぬいみじうれぼし
まどをせ給ふ。ゐこゑもり聞えつゝいとゝいとゝ。世の
中ゆすりみちたるこゝちするに、たしかに聞えさす
る人もなけれど、一品宮（章子）のをさなげになかせ給ふも、
いとゝじうあはれなり。いつのまにか、東宮の御かたに
ハ、除目ありて、頭五位藏人、六位藏人などなり。よろつ
にとな獅子こまいぬ、ひのとづゝ、ゐはかしなどわた
り、ひきかへたるありさま夢の心ちなむ。ゐける。れい
のさほうに、御めのとことぞ、のりたふのいよのか
みさねつなのりふさ、よしみちなどつかうまつる心
ちとも思やるべし。かゝふさの中宮れ亮いひつゝけ
てなく聲のたどろれとろ志きもあはれなり。むかし

東宮　後朱雀あり
ゐ年二十八
除目　叙位のゝち
り前ゐもつたえさう

ハ、かく位にてうせさせ給ふハ、まさなきるれぼく、と
ころせかりけ也ど、今のよはさるきびしきるもなし。
閑白（頼通）殿も、れなじ殿にれをしましいまのうへも、いか
でかはなさけあくもれはしまさん。院もゝやも、たゞ
なき人よて、れはします。せ一日れゆふさり、京極殿の
東對ふれはしまして、そこにてゐ合佛あどあるべけ
れバ、あゝつきに中宮一品宮も、北の政所のれをしま
す。鷹司（倫子）殿ふいでさせ給ふ。位ながらの御ありさまハ、
ところせくいとゝじかるべけれバ、れりゐのゝかとに
ゐしたてまつらせ給てけり。殿ハいまれ内のゐるど
もおこなをせ給へバ、内大殿こと殿はらぞそひたて
まつらせ給。いでさせ給あゝつきの月れくまゐきに、

おはすてゝのゝ
古今集雜下みな人
ちらもとの心ふく
さめゝのねつさらし
れやをはもてやま
あてる月をえてと
いへる歌の意あり

ものねぼえぬゝのうちふねぼえける、出羽雜、
めぐりあをんたのゝもなくていづべしとねもひ
かけきやありあけの月。女院も京極殿にいでさせ給
ひぬ。院も宮もねはしますやうにもなく太つゝいら
せ給へり。雜書司どのゝうへゝまちつけ聞えさせ給て、
よろづになぐさめきこえさせ給へど。をばすてゝの
ゝぞかきつくすべくもあらず。開白殿内大殿とのは
らふりはしめ、なきこひきこえ給はぬ人なし。とのゝ
うちにはしめて世の光をとりいでさせ給しふり
はじめ、四ゐんをへのめでたくねはしまし、四年の程
をしくいゝじく夢ちとねぼしまどふ。女院の四ゐの
うちふ生をさせ給し程、殿のねぼしよろこびしふり、

扶桑略記長元九年
五月十九日葬神樂
岳東辺分菩提樹院
是也

けふいまゝでれ四ゐんなどよろづをバ申すべきにも
あらず。たゞこひしうかなしういゝじうねぼしめし
まどはせ給ふ。中宮も露の四ゆをだにきこしめさで、
日比にならせ給ひぬるを、又いゝにと、女房などハも
てさゝぎきこえさす。四葬送れ程ちゝくなるにも、か
なしなどらもねはしますほどはさてもあるを、いま
ハときゝまるらせんこそいゝじう、いとゞなどの給
はせて、せじれきゝ、宣旨
いつゝまた空きからけからだにものこりなくと
もからんとすらむ。出羽雜
ちらぬかなきゝが煙を見るまでにかずならぬみ
もあらんもれとは、又

つちとの　土殿ゑり表中ふこもり居るゑなり

たうハ　うゐの誤よやとゝゐ流あり

いまはとてけぶりとならんタべこそかおゝしきことの限りなるらめ。」一品宮などのれはしますべきつちどのつくるおとをきゝて、いつも、

いつゝゝとみつばよつばとれもひしをれもひもかけぬとのつくりかなかゑし

なゝゝふさざめゑきよいあすか河たまつくりなるやとゝゝゑらじや」女院の御たうれこなはせ給ひけるに、やゑぎのつくりたるを内に参らせさせ給へりけきバ、えだハまことゝてありゑるとバ、清涼殿のつぼにうゑさせ給へりけるゑ、れひはでたりけるをきゝ給ひて、

宮ゝせじ

うきふしと思ひながらもれひいでんやなぎれいともあはれなる哉

いづも

かたこにとれもひよるよりあをやぎのめのいとなくやかゑしのるらん」など志のびつゝ、なゝだの隙にハ、いひかはしける。顯基の中納言人よりハ、ことになどやれぼゝめけん法師になり給にけり。よにあはれなることに、いひのゝ志る。女院より御消息つゝたゝしたりけるに、

世をすてゝやどをいでにしこゝろにもなゝこひしきいむゝなりけ流」と申給へりけれハ。

侍従の内侍

顯基　長元九四十、八出家廿四永承二、九一薨廿五　俊賢子高門伊孫為房養子

顯基出家のすハ略紀る錄抄ゝすゝ後ゑ

みもゝゆ

この歌ハ後拾遺ゑ見えさり

ときのまもこひしきことのおぐさまハ世にふた
さびもそむかなまし（さら集）を。わほせごとめきてありける
なるべし。内よりとて、御つかひの参り。ぬふ〻などま
るらせ給へるまもまづかきくらしてのち賞しめし
まとはせ給ふ。ぬさうそうの夜、

いではの辨

かけまくも思ひそめてしきなれバいまもくも
井をあふきてぞ見る。中宮亮かねふさがもとに。入道
一品宮のさがゝ。

ほどふるまバなぐさむかたもあるべきをたえぬか
ゝだれあめハいとにぞ。（馨子）齋院のおりさせ給ける夜の
有様ふどれいみじう哀ふりけるを、ある人

このきくらし　紫〻ふこのきくれゝるさまゝ

さゞゝ　頼光の女

かけてだに思はざりけんこぞのけふかつらぎ山
にあとたえんとハ

四條中納言定頼

世の中のあはきなるまハわほそらに雪もなゝだ
をとしまぎりけり。ふとぞ聞ゆなりし。ぬめのとの内（豊子）
侍のすけ、あうらさまにまかでゝあまになりにけり。
子の縫殿助といひける法師に成にけり。

わほかたのよその雨とや思ふらんこふるなゝだ
のふるとゝらずや

おくれゞとわもふこゝろにそむけどもこのよに
とまるほとぞかひなき。なゞものわぼえぬ心のうち
ふ覚え給ひけり。

この秋ぬ葉ふあり

少將のないし

いまゝでも世よありへんとれもはぬをそむくみちにもおくれぬるのな。女院に僧の裝束せさせ給ひて、御いゝにこもれる僧にたまはせんとて、故院の北方の女房ふぬはせさせ給へバ、

けさこそをバなけきのうせるかゝだよハみぎのたもとぞあらはれにける。御ぶくになる夜、女院の兵衛内侍

あらハれ　洗ふ　りあらたまて洗ハれさりとなり

かたゝとてきれバなみぐれふぢころもたぼりもあへずそてのこぞひづ。御葬送の又のつとめて、いゝじう雨のふりけるバ、

ぬぎりにしけぶりハくもにまゞひつゝたのびもあへぬなのおとこのな。これも、女院の女房、

こふるまにいやとほさゝるわゝれにハとゞゐんかたもなきぞかなしき。ゞせちれ君、月のあかき夜、

さやかなる月も涙にくもりつゝむゝしみし秋のこゝちやはする、

兵衛内侍

雲れうへにみしよのきゝゞなければや月もかゝだにくもるなるらん。五月雨ハいとゞをれまかく、のきれあやめもたらすがほにて、すぎぬぱゝなくて御ほうしなどもすぎぬれど、ほゝ、はれまかくてあかしくらさせ給ふ。

卅四　晩待星

さやうれる云々　風雅集ニあり

このくて云く 長暦四年二条程度焼亡せしことあり

かくて内つくりいでわたらせ給へし。皇后宮（陽明）二の宮（娟子）の、御ふミはじめにぞいらせ給へる。あはれにたとなびさせ給へるにも、とし月ゝをしめさるゝやがてとゞめたてまつらせ給へバ、さぶらはせ給ふ。弘徽殿ふ、皇后宮（陽明）、藤壺にいとの、姫宮（祐子）（謙子）たちの、いらせ給べきにておかせ給へり。梅つぼにい、内大殿れ（生子）女御なし壺にい、きいのやうに、春宮れはします。宣耀殿ふ、一品宮れをしまいて、梨子壺れきたのやをうへのにつぼ祢にせさせ給へり。細殿ふどゝいとをうしそりはしのつまど、からびさしふどゝいとをかしういまめかしふぢつぼにのゝ、れはしまいて、一のところなれバ、さすがにはるくるかたなく、へいのめぐりてありしに、いと

るくる 晴るゝことあり へいい 塀

あり

扶家略記長久三年三月条云廿六日己巳春宮大夫藤原頼宗卿息女延子姫入内

をかしゝ。入乃（脩子）一品宮、東宮大夫殿の姫君参らせ奉らんと、申させ給ひてくまゐらせ奉らせ給ふ。一ほんの宮も、いらせ給ひて御對面などありけり。三日ばゝり有て、みやはいでさせ給ぬ。大夫殿これもつとさぶらひ給ふ。とのゝ（通房）大納言ハ、源大（師房）納言殿の御むこなならせ給ひぬ。いとはなやかにもてかしづき聞えさせ給ふ。内わたりいとゝいまめかしくをゝしく。殿のみやもいらせ給へり。むゝしれぶえて女房などもの哀なり。梅壺の女御などれのぶらせ給を見るにも、思いづるゑれはかり。四五日ぶゝりれはしまいて、出させ給ひぬ。宣耀殿麗景殿（延子）いとちかき程にて、加賀左衛門、出羽辨などいひかたすうへの御つぼねよりはましてむゝひに

長久二年

ていとをうし。琵琶さうのこと、ひきあはせ、殿上人まゐりなどしてをうし。四月ばうりのをうしきに、こぶたゝなたの、ゐぞ殿、そりはしれ、くくちなどよ、殿上人参りて、くひなれたゝくもなべての所にはぬぞ、うちつけなるやなかうちわさりにたく物ふしと、人々思へるもことゝりなりやまことや、梅つぼのはうたに、

後朱雀

この春うへより、

はるさめのふりしくころハあをやぎのいとゝだれつゝ人ぞこひしき

と申させ給へれば、

あをやぎのいとゝだれたるこのころハ一すちにしもれもひよられずときこえさせ給へり。ほかへ、

あをやぎのいとはかたくなひくともれもひそめてんいろハかはらじ。又はうへり。

あさゝどりふかくもあらぬ春ハいろかはらじ

といかゞたのまんと聞えさせ給ひゝり。

(四五)

瑞のふるまひ

世の中いとさゝがしう、心のどかならぬに、閑白殿春より久しくあやをわたらせ給に、四月になりていハすこしふるしくあらせ給ふに、大將殿世の中れはいちわつらはせ給ひゝり。七日といふに、うせさせ給ひぬ。あさましなども、世のつ称なることをこそ、ことしぞ世よがらせ給ひける。殿の覚しめし志つませ給へるさまゝことゝりにいゝをじをゝうへれはいのうち、大納言とのなどゝとりあつめいはんかさなき、はこゝろの

扶桑略記長久五年条に薨去の事あり

うちともなり。ま弥ひつくすべくもあらず。ほかゝさ世ゝもいとゞくをしゝ聞えさす。御年の程かたちありさまのめてたく物をせさせ給へる、世の中よかゝるるゝハおかりゝりなどをとこなどハ、むゝしのためしをひきてをしみ聞えさす。御葬送の夜、もの覚えずまどひあひたる心ゝもさかゝらに、うへ、

うつせをのからをたれむにあら弥ども又こはいうにわかれはつらん。といとゞくれぼしまどはる。それはしましける御帳のうちにくものすをかきたりけれバ、

わゝをにし人ハくべくもあらなくにいかにふるまふさゝかにそこは。ゐ返し、宰相れきみ、

うへ道長の室あり

きこくべきふるまひからぬさゝかにはかきのゝたゆるこゝちこそすを。

世六 根あはせ

寛徳二年正月十六日に、位ゆづりの事ありて、春宮わたらせ給ふ。いとげにて参らせ給ふ。いとゝきはありさまをよそにたぼしめしつるよりも、いとゞうかなしくれぼしめさる。いとゞうならせ給へバ、かく方ゝき給ひそ上東門院によくつかうまつり給へ。二の宮思ひへだてずたぼせなど申させたまへバ、ほかほに袖をおしあてゝれそします。ときなりぬと申せどもゝにもえうごかせ給はず。内侍ぼはかしのはこ給はすをバ、かゝあげてとる心ちいとゞうて、つゝゝ

後冷泉
後朱雀
後冷泉
御詞
三条

扶桑略記、寛徳二年正月条云十六日癸酉、天皇譲位於皇太子親仁親王、同日第二皇子尊仁親王立皇太子、年十二歳

いとげ 糸毛車なり

このあと頼宗北の天子ゆ桜の寺あり

さいかむ　詰りいちめることなり
水い　水沃なり

もあへず、まゞくしとてさいかむ。水いたてまつれバいとたへかたし。この世ふてだにたゞしやすめよとはほせらる。いとゞうかなしゝたく夜ふけてかへらせ給ふ。上達部殿上人、さながらつかうまつり給ふ。れおじるなるゆゑあれど、車にてれはしましつるを、御輿にてかへらせ給ふ。いみじうめでたしゝこと人に猥りきこえさせ給はゞ、ましていゝならん。齋宮のゆるをなん、いとゞう申させ給ける。二のゝや、いゝにせんすらんとぞうちくにもたはほせられける。故院と女院も閑白とのも、同しことにはしましゝだに我とちこそよかりしゝ。するゝの人々は、よゝらぬことをいひ出、おのつからなることもありしに、ましてこれは

故院と　とゝもの誤ま

ゆはらもゝはらせ給ふ。ゆうしろゝもかはらせ給へきバ、いゝにとたばしめすなるべし。御かたゝのゆるゝともたばしめし申させ給ふるともあらめど、人きかゝはかきつけず。十八日のゆふさりにはゝようせさせ給ひぬれバ、いふにもれろかならすいゝし。上東門院のたばしめしかげゝせ給さまいふかゝなし。今ふがくてかゝるゆゑを見る事と、人のゆふらんゝをさへゝてたばしまどをせ給ふ。とのばらもいゝゝじうたばしたち。内の大殿はうらめしきかたもそひてなみだたちさせ給ふ。

ゆはらもゝはらせ給ふ　後冷泉ハ嬉子の母腹後三条ハ陽明門院の母腹あきハかくいふあり

扶桑略記寛徳二年四月条三十八日太上天皇春秋卅七於東三条第崩

八日　百錬抄ハ十日とあり

四月八日にハ、御即位ありのこる人なく見る。もんいる程車どものきほひ入ほどいとおそうし。玉のかう

後冷泉

あぐら　胡床ゝ

この所文章荘厳その状見るこゝろこゝとし

ぶりしてあぐらともものうへにゐなゝたる、からゑのこゝちして、女房などは、吉につきてさぶらふ。雜のめのと、内侍のすけゝなりて、それ日のぢまゝなひし給ふ。めでたしなども世のつゐなり。丹波ぬめのとをきさみちの中將のむすめ、宰相のめのとは故致仕ぬ大納言のうまご備前守長つゐのむすめなり。さるべき人々殿上人など、花ををりたる心ちしてめでたし。ぢこ〳〵するほど、ぢめれと違いかなりけん、あさ日のかゝやきいづるを見る心ちす。ことゝしぞ廿一になら せ給ひける、一品宮ハ廿にぞらせ給ふ。后にたゝせ給べけれど、ぢぶくすくし、神わざなどすぐ〳〵てとたぼしめすなるべし。令婦藏人十人は禮服とてあかいろ

ゐぎい　威儀ありとなりあげハ裳抜なくいつれも令婦ゐて儀式の時のあ五間候する役なり

糸極殿云々　里内裏あそのの記後のありさまゐひやり奉るべし

のからきぬのそでひろきをぞきたる。今十人ハすりからきぬきつゝ、かゝあげてならびさぶらふ人ゐぎのこゝとはりあげゐど伺の子也。京極殿にたはします。寢殿と南殿にて、西對を清涼殿にたたり。北のたいに、一品宮たはします。北の一のたいを、内侍ところなどにたたり。に〳〵の中門の廊を陣ぬ座にたたり。いこじの京極とのゝありさまや。こかどゝところ后み所たゝせ給ひぬ。又も一品宮たゝせ給べゝめり。

内ゐハ云く　百錄抄永承六年　茶元五月五日禁裏有根会盃酒会後宴也有歌会并絃管興

こひち　泥土なり

内には根合せさせ給ふ。左頭すけ綱の頭中將、右頭四條中納言のこのつゐ、いへのべん、わゝくはかやうにたぼえある人々なり。左右廿人つゝわきて、えもいはぬすはまのかき祢を、たつ祢つゝ、まだたらぬこひち

にたりつゝ、ひきいでたる一丈三尺ばかりなどもありけり。又たいうちしき、花そくなどのありさまいふべきにもあらず。中宮皇后宮（章子 寛子）などのぼらせ給へり。中宮女房の裝束は、たゞいとうるはしくことさらに菖蒲のきぬを皆うちてなでしこのおり物のうはきよもきのからきぬ、おふちのもなり。皇后宮（寛子）のハ、昌蒲あふち、躑躅、かきつばたなどか彩して色色をつくりくちおきいそじきるどもをつくさせ給へり。をりくにつけてをうしきるのこたほうり。

以下歌あり略也

天喜六年 康平元年と改まる

世七 煙後

一條院のやけにしるだるあるに、内裏大極殿ひとよにやけぬ。いとゝあさましこれハ天喜六年といふ。

かゝじ二月廿三日の夜、御堂やけぬ。さばかりめでたく、れはします百體の釋迦、百體の觀音阿彌陀、七佛藥師などよ六の御佛達火の中にきらめきてたゝせ給へる、あさましくかなし。女院の御佛なども、めでたくいそじかりつるも、夜のけぶりにてのぼらせ給ひぬる。なゝわゝいみじくかなしたれにかありけん、かくぞいひける。

わゝちけんけぶりのゝちのかたゝだになきよとまゝてかなしかりけり。（頼通）かくあさましきのこれほかれハ、ほかのうちに、殿もあさましくたゞしめして、齋院（禖子）たゝしたてまつらせ給ひて、麗景殿（延子）の姫宮（正子）ゐさせ給ひぬ。たりさせ給ひても御心ちなやらせ給ふよ

山堂 法成寺殿ヵ

百錄抄四康平元年二月廿三日法成寺拂地燒東北院同為灰燼廿六日新造内裏并中和院大極殿東西樓朝集堂北寺燒亡去廿三日省試題云偶燭於明人文之徵也

禖子 禖子ハ子ともヽ本後朱雀の皇女なり

なし。女御殿も齋院にまゐりまよひてれいします。

㊇松れ志つえ

後三条

をうどはいつしらわたりゐさせ給ふなんとれこそはぼしめして、この四月にも犬極殿の俗理なとせさせ給ふよ、あたらしくつくらせ給ひて。をこじめに世ののはるけしきのあらんいびんなるべしと覚しめしてなどぞ、世人申し。まことにや、これ志はすれ八日わたりさせ給ふ。このちゃく成てはれもくわつらはせ給ひて、おりさせ給ふにいと哀なり。あひもれもはぬなど、弘徽殿の壁に、伊勢がゐきつけゝんなど、おもひいてられて、なにるにもめのゑとまる。わたりさせ給ひて、弘徽殿にれいしまして、十六日にこそ開白とのゝれは

延久四年

教通

あひもおもはぬ大和物語亭子院の帝おりさせあひてこうるれしあひもおもはぬ百敷をえさらんことのおくうかなしき

します、二條殿にいでさせ給ひぬる。春宮に二宮ゐさせ給ひぬ。女御基子ハ三宮のくらゐにて、年官年爵えさせ給ふほどなど、いとめでたし。またもたゞならずおらせたまへり。開白教通とれを御らんぜるにも、中宮一品の磬子聯子

ちごおひ児生おらんとゝ

こゝやあをにれぼしめす。御ちごおひのいじめのれはしましとところとなんあはれおり。うへはわざとにはれいしまさ祿どゝ。後三条

をとこゝろ後ろ補に祝ゐとゝ

こしめす。東宮もぐしたてまつらせ給へり。梅つぼの基子女御、またいとうつくしうめでたきをとこゝやうゝたてまつらせ給へり。つきせず、いゝじき御ありさまなり。院れいならず、たはしませば、いとはかやうかることとはなし。公基の丹後守の、六條のいへ院にまゐ

後三条

御方違　方角避けなりこの頃の俗とゝるべし

女院　即陽明門院なり

らせたる、御方違にひるわたらせ給ふ。上達部殿上人、わざとの御物まうでのやうにはほくつかまつれりめでたし。もの見車などいとはほかり。ロいちいいとさはやかにはしますをうもはいします。掛つぼの女御殿も、六條に參らせ給へり。かくて二月をつゝ天王寺に詣させ給ふこの院をば、一院とぞ人々申ける後三條院とも申めり。女院も、一品宮もまうでさせ給ふ。さきど上達部殿上人、はほくもまゐらせさせ給はず。むつましく覚しめす人々、さてはあそびのかたの人々をぞゐでは、しましける。まつ女院の御車、つぎに一院、そのゝちに一品の宮（聯子）はします。女房車ふたつつゝ、女院のゝ桜とともにすわられうちたる、一院のハ櫻に山吹、一品宮のハやまぶきのにほひ、一ハ車ハこき、二のくるまはうすくにほひたり。はいします。のほどなどいとをろし。八幡にまうでさせ給ひくゝ去バしばかりありて、内の御使頭中將師忠のきみまゐりたり。御返うけ給ひくゝのへりまゐりぬ。一品宮うへのやしろにのぼらせ給ふべきよし申させ給へば、舞人ぐしてのぼらせ給ふ。石清水の程にて御祓あり。舞人にもれなどかづけさせ給ひくゝかへさせ給ひつ。四位の少將いへかた、侍從道良、兵衛佐顕實などを、御こたくゝの御ともにて、さぶらふべきにてとゞめさせ給ふ。せ一日、けふハ皆かり裝束ふて、烏帽子すかたともならはぬ御心ちふをろしく御らんす。ゝんたちにも

きしゐた云々　おの後ふゐもなゐるべき裝ひふせりとゝ

せい　制（禁制）

いつゝ　五衣のこと

こな狩裝束にてさふらひ給ふ。橋もとれつといふ所にくだらせ給ひて、御覽すれバ、くゐくれ船ともゝ御ふね共も、めもはるかによせわたしたり。こな御ふゐ絲ともに、たてまつりぬ。御舟れありさまはぎしかたゆくすゑありかたけに、たつくしたり。いどこつゝ人々あたりくにつかまつれるさま、としころなにこゝにも、せい有つるを、此たひぞのこるなくたつくしたりける。女房れきぬハなゐいつゝなり。上達部あるハ御ふゐにもさぶらひ給ふ。上達部れ舟にものりたまへり。殿上人ハ殿上のふねにのりて、おそびくだる。廿二日のたつのときばゝりに、御船いだしてくだらせ給ふ程に。江口れあそび、ふたふねをかりまゐりあひたり。緑などをそたまはせける。ものなどハぬがせ給はぬことをいふさるハうつるものゐおくるゆきへて衣をぬきて與ふる定りあれいく

ぬうせのハ中　與

分ハとゝ分も　左今伊勢津の國のふゐらのそしもつくるなり今をとゝ分を何まなとへん

師家　經輔の子

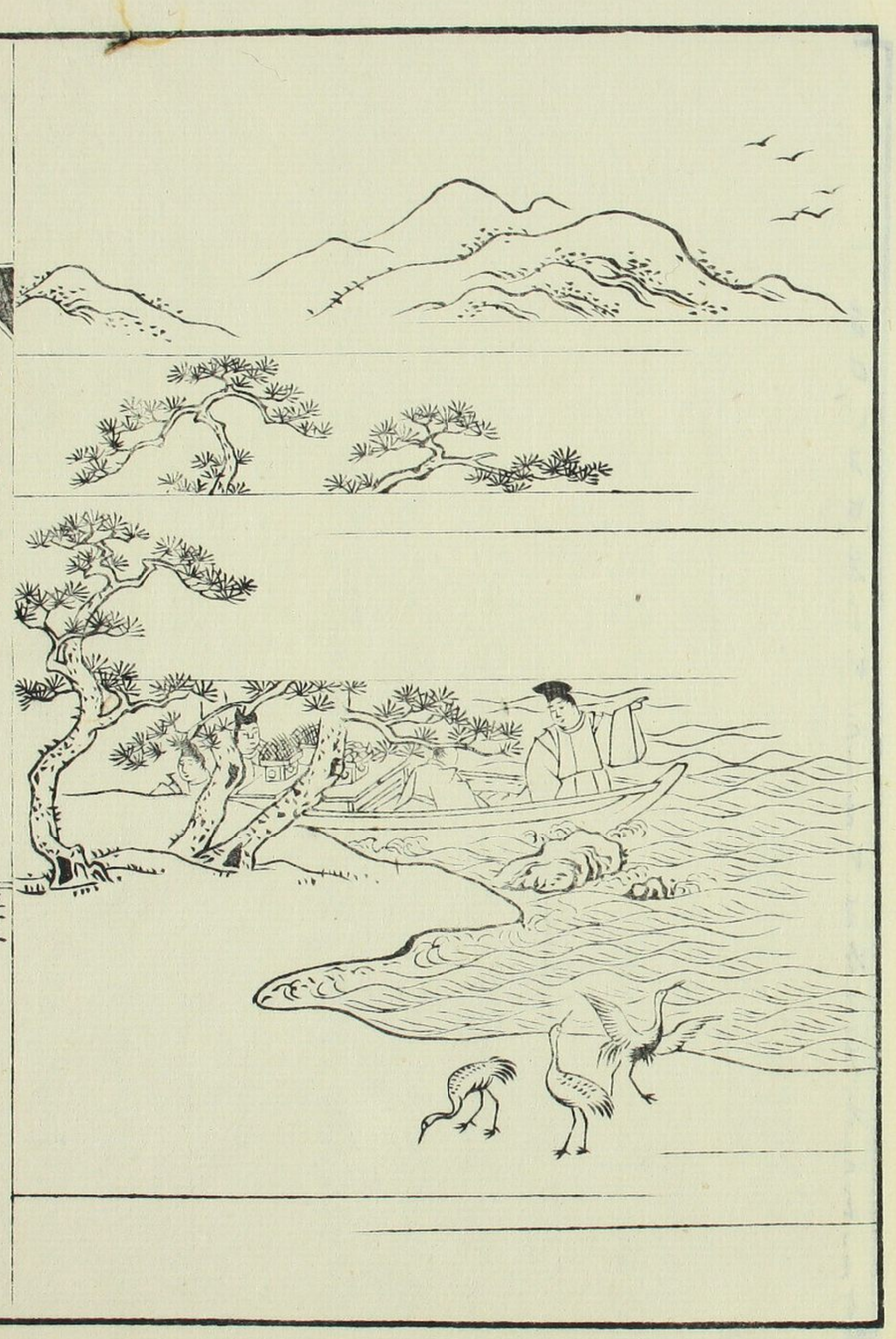
す。經信れ左大辨琵琶、權中將季宗笙、民部卿大輔政長も笙、師賢の辨、歌うたふ。笛れ音もびそのおとともせゝの河浪にまがひていミじくをゝし。こゝハいつくぞせとはせ給ふ。東宮大夫（能長）そ、つたへとひ給ふ。これハながらとなん申すといふ程に、そのはしハありやゆきたつ絲させ給へバ、候よし申す。ゐふ絲とゞめてゐらんぜれバ、ふるき橋の柱たゞ一のこれり。いまハわか身をといひたるハ、むかしもかくふりてありけるとゐもあはれなり。ふゝつ河といふ所に、れはしましぬ。海の色も空れみどりに見えまゞひてをゝし。とゐき舟れ波あげたるなど、いひしらずこゝゆ。このほどに摂津師家

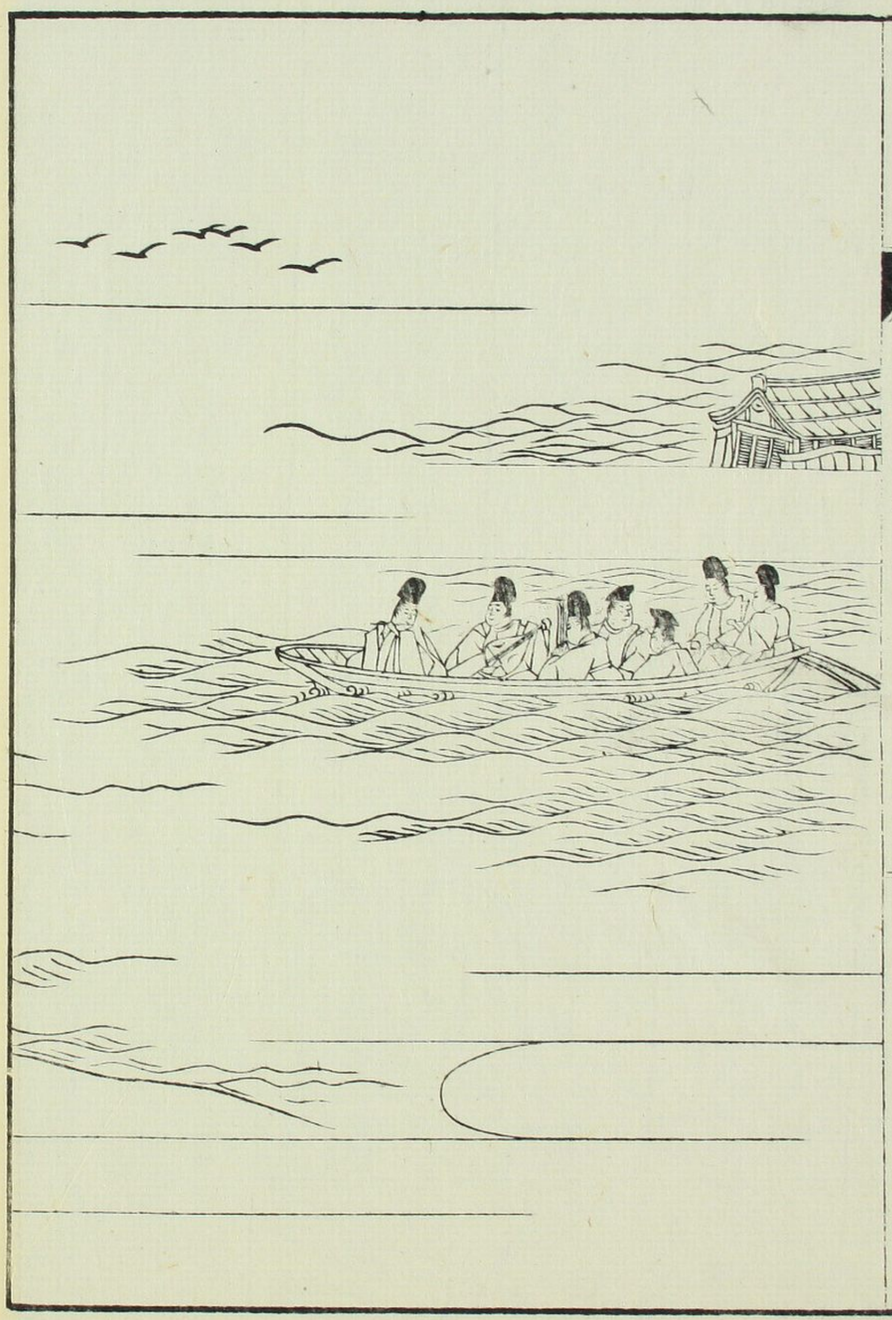
守さま〳〵のをりひつ、ゐなどかきたるに、くだ物まゐらせたり。日やう〳〵くきて、みぎはれたづのかすゝのたえまよりこえわたり。かは浪のおとも、つるのこゑもさま〳〵に心うごかし、かゞり火のかげもみなそこかくれかくれもしろなるら、ものこゝろほそし。うぐひすれこゑもかへるかりれひゞきも、とりあつめてとさらの様なる、たびのそらなり。廿二日ひうちくだりて、霞たゞびきわたる程に。御車どもかたゞくれはふやすらふ。まづ住吉に參らせ給ふ。開白（敎通）殿くれなゐのいだしうちきに、梅のなをしたてまつりたりしこそいとをゝしく、此たびけ思いでゐきと人申々り。まし

さうそきたる紫衾にしなるものしるもなり

てこと人々の裝束、いふかたゐし。御稜ありてそのゝちみやしろにまゐらせ給て。はあそびはてゝかへらせ給ふ。女院の女房たちきどもに、こきうちたるうはしき物の、いときこゆ。一品宮（後三条）のにハ、もえぎともふ蘇芳のうちたる、院のハ宮々にこきうちたる、日のくるゝ程に、天王寺に參らせ給。あめいたくふりて、物のはえもなし。御車よせて、御堂にわたらせ給。この程に藏人少將公實内のはつゝひにて、まゐれり。廿四日ハ御堂のまよくはらんじかめゐなど御覽す。廿五日の辰時ばかりにぞ御船いだす午のときふ、左衛門權佐匡房まゐれり。色々さま〳〵にさうぞきたる中に、あかきうへのきぬに、こと〳〵ちくてまゐりたる、いと

公實　實季の男





以下古製をもしめ供奉の人の歌あり略す

めつらしく見ゆ。左中辨實政題たてまつる。みてくらしまをいふ所御らんず。實政を御ふ祢にめしあげて歌ども講せさせ給ふ。

布びきのたき

師實

頼通及教通の歳のおこのあり

業平が云々 伊勢物語に布引の滝見たることありしをいふ

それ比、殿布引の瀧は覧じにはします。道ゆほどいとをかしうさまくのかり装束ふどいふかたおし。業平がいひつゝけたる様にぞありけんかし。

師實

關白殿

さらしけんかひもあるかな山姫のたつぬてきつるぬのびきのたき

皇后宮大夫 師房の子 頼房

名のいろ只ちらゆくもいきとゞゆるかなたれさらしけんぬのひきのたき

皇太后宮大夫 長家の子 祐家

めつらしく雲井をるかにみゆるかなよゝ流たるぬのひきのたき

皇后宮權大夫 道方の子 經信

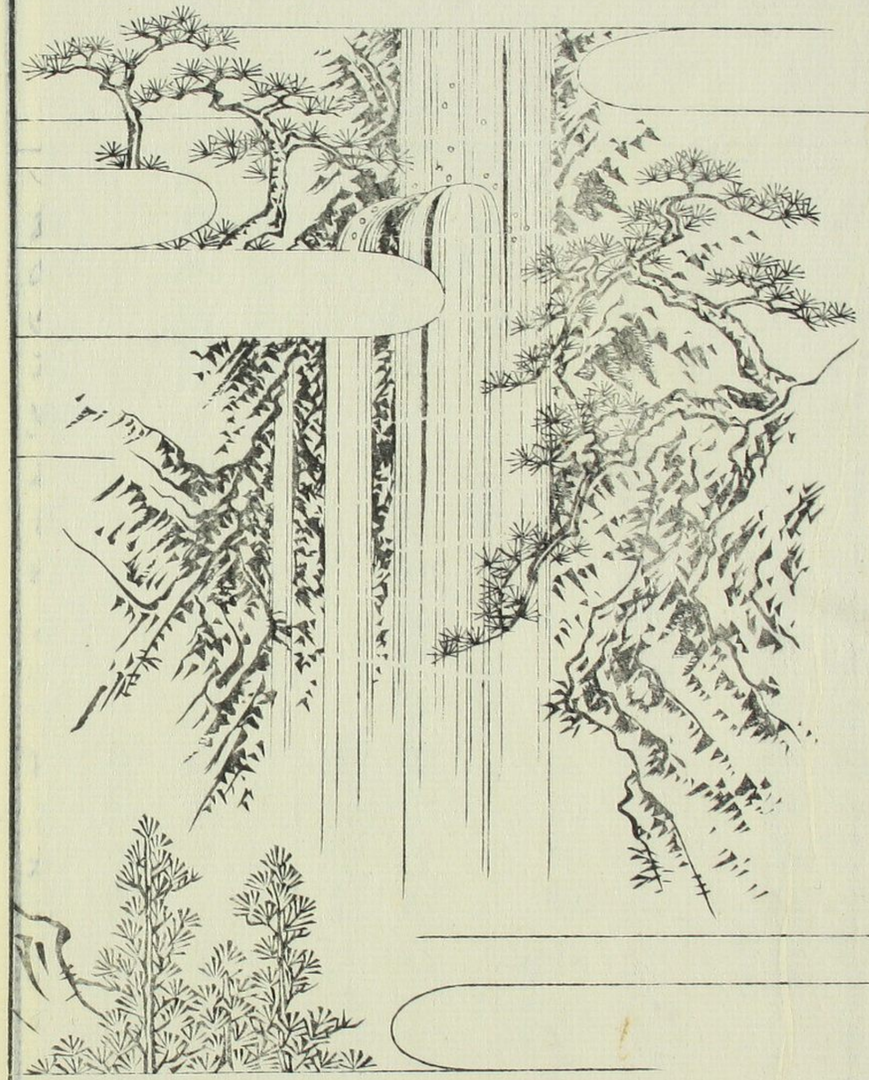
雲井ふりとゞろきたつる瀧つせハたゞおらいとのたゝぬなりけり

三位中將 師實の子 師通

こなかこの空にこゆれいおら雲のたつにまかへるぬのひきれたき

權中將 顯房の子 雅實

たちかへりいくたのもりれいくたびも見るともたちかへりいくたのもりれいくたびも見るとも



あらじ布引のたき

中將公實（實季の子）

ふとゝもにこやゝひめのさらすなるたらゝをわれぬ布ひきのたき

播磨守為家

こなかゝハ霧たちこめて見えぬゝもおとゝぞ空なるぬのひきのたき

家綱

いくひろとたらまゝしきハやまひめのはるかにへたるぬのひきのたき。

（早）むらさき野

月日ハかはれど、たれも覓しなげくに、内ハなゝそのかゝにかはらず、まつりごとなどゝも、いでさせ給ふことともなく、あはれに心ふかくたゞしいらせ給へり。いゝに覺しめすゝゝ、九條れあなたゝ、多羽といふ所に、池山ひろうつくらせ給ふハ、たりさせ給ふべきは心まうけゝやなと申思へる程に、十一月廿六日ゝ、二宮に御位讓申させ給ふ。ことしぞ八ゝからせ給。故宮（善仁）はゝ子の後ハ、五節陪時然さまかはりて、いでさせ給ふもなく、よろづをすてゝ、もさまじく、かりそめふおぼしめしなさせ給ひゝけるゝいとあはれなり。賀茂ゝゝあれの日ごとに、行幸のありつるもとまり、齋宮ども、またゐさせ給はざりつるも、かくたぼしめしけれバにこそと、あハれゝこゝろふゝく、世のつねならず

月日ゝのはれと云々應德三年あり

善仁親王　即ち堀川院也

百錦抄云應德三年十一月廿六日天皇讓位於善仁親王先為皇太子由載宣命

かくてしも云々

ぬ心の程なりかゝるたぐひあらじと見えたり。これを見奉らせ給ふまゝ、右大臣(顕房)どのにいゝまゝあれにありがたくこえたてまつらせ給はんとゝいとどもよわさるゝ心のうちならんかし。十二月十六日に位なり。御輿ゝこづらゆひて、たてまつれる。めでたきこもなこだぐましくこ宮(中宮)れまゝてみたてまつらせ給はまゝうばとあてれなり。心めのとたちないゝれすけこなりなどいとめでたゝ。ど(師実)れ摂政せさせ給。ことゝりのゆなれどさしあたりて、又いとめでたゝ。院(白河)のゝありさまかくてしも心にまゝせさせ給ひて所々御覧し御物詣などやすらかにめでたきゝさまも。齋宮こゝ故内(能長)大臣殿の女御(道子)

くとハ中宮賢子東宮実仁のかくれさせ給ひしことをいふ十九日云々寛治二年正月十九日なりこの日ゝまゝありしゝと例のもぶきぬ

百錦抄五寛治二年二月廿二日上皇奉詣高野山

のゝはらのひ(善子)め宮居させ給ひぬ。たゞつゝかゝらんことを、女ゝ殿ゝ覚しなげゝせ給ふ。十九日(寛治二正)院(白河)こゝ行幸ありめでたくこそゝしき儀式なるこゝ心ひつらゆひて、わりさせ給へるゝ、すゝろなる人だこなこだとまらず。まゝて院の心のうちにゝいふゝたゝかくなん覚しめされける。院の人とのゝ人など、加階しめでたし。二月廿二日院高野に詣させ給ふ。世の人見のゝしる。殿(師実、後房、頭房)左右の大殿(師通)内の大殿こな参らせ給。との内大臣殿ゝ御おくりぞかりゝて、かへらせ給ふ。左右の大殿ゝ、まうでさせ給ひけり。ちゝくなりてあゆませ給ふ。こゝこゝならでゝ、ありゝせ給はざりしにたゞげゝしきやまをこえさせ給ふゝとくあもれここ見まゐらす。ゆこゝふ

内大臣云々　寛治五年のことなり

春の云々　寛治六年の春之上卿　その日第一の當番なり

どふりていとゞあはれせけり。廿九日にかへらせ給ふ。

内大師通殿の少将殿、今ハ三位中将忠實とて、こにおく花やゝなる御あり様なり。左大臣後房殿のはむこゝなし奉らせ給へる。うちの宮ゝなど覚〳〵めし志らとも、殿の申させ給ふに、志たかもせ給ふもことゝりゝぞ。程おく中納言ゝおらせ給ひて、中将れ中納言にてたるの春日殿れ上卿せさせ給ふ。御ともに、世ゝのこるなく、君達の殿上〳〵したるもせぬも藏人五位どもつゝうまつれり。かり装束をか志う、心々思ひ〳〵心をつく〳〵色をつくさぬなし。寛子宇治殿ゝ、四條宮れた〳〵ますにゝまてうぢ檳見やらるゝほどに、ゐさゞきいそしうめでたく

さほゝの佐保殿ふて淡海公冬嗣大臣の家なり

春日の神藤原氏の氏神ふきいうくりふなり

て、女房のきぬのこぼれ出さる程、ゑにかゝまほし。まことにめもあやなり。思かけぬうちのわたりのゐさじきのまへわたる人々をんふつかひれ内侍などゝ

ういなくて、いとかたをらいたくつゝましふがら、わたる程まばゆく思けり。木津河ふどわたらせ給ふ程、えもいはずれもしろうをうしかりけりかくてさほ殿ゝつかせ給ひて、祭のぎしきありさまゝのつねふらずめでたくて参らせ給ふ。つもれる人大師實殿れうくてれはしましゝゝ、ゐ孫忠實にてかくれはしますを、えだえだざうえいでさせ給ふを春日れ神も心ゆうせ給ひくや、めでたく見奉らせ給けんと心のうちに思あまりけるを同じ心に志つのをまでめで思ひ申けり。

又こゝろさ山春日の三笠山ゐ見ぬといふをこゝにていへるなり

この歌下句ゐ藤民の栄えゐうんことをいへるなり

又ゝ日かへらせ給ふ。ゐ供の人々、みかけふはかりさうぞくうちこだれ、今すこし思やりふかく、世ゐ又みかさの山のかゝるたぐひなくめでたう思ひ餘て、車ひきとゞめつゝ道すがら見る人の、

ゆくすゑもいとゞさかえぞまさるべきかすがの山ゐ松のこぞゑゐ。などふるめかしき人ゐれもひける。

標註 榮花物語抄卷六大尾

標註 榮花物語抄附録

自帝王至源氏系圖

人王五十九代

○宇多院

六十代宇多第一

醍醐天皇
母皇太后宮胤子内大臣高藤公女

前坊
母京極御息所時平公女

保明太子号文彦太子母皇太后宮穏子昭宣公第四女

前坊

高明
賜源氏姓第一號西宮左大臣

三男源大納言中宮太夫民部卿未子云云母師輔女

俊賢

女
為平親王北方

中君
正光室

治安三年十二月在尾張守源少將後祝紫辛帥中納言

経房

美濃守母齋敦女

實基

寛子候

女子

一男中納言姑右近少將頭中將

顯基
宇治殿養子と卅巻ふ有後一条院崩御の時出家卅三巻ふ有

二男宇治殿養子号宇治大納言と姑頭中將皇后宮太夫兵衛督

隆國

源中納言と卅八巻ふこゆ宰相中將母實成女

資綱

四位少將

家方

後房室と卅六巻ふこゆ

女子
顯房室と卅八巻ふみゆ

式部卿
基平親王
盛明親王養女
道長公再室
高松上
女 兼道公室園融の嫄子の母

中務卿
代明親王
源中納言皇太后宮太夫
隆俊
女子
四男宰相中將源中納言と
隆綱 卅六巻ふ有
其
齋宮源子と候
女
桃園中納言長徳二薨
保光
女子 行成母
女 母賴國女郁芳門院宰相
乳母と卅九巻よミゆ
一間致仕大納言
三巻ふ有長徳四
七十薨七十六歳
重光
但馬守廿四
巻ふ有
則理
長經
女子 宰相君後
三條の御
乳母也

行明親王
麗景殿女御
伊尹公北方
恵子女王
十二巻卒
女
女 伊周室
女子
女 大納言君十
巻ふ有皇后
宮城子と候
女

○ 六十一代諱
朱雀院 母同保明太后と申
号桃園式部卿
重明親王
冷泉后太皇太后宮母皇
太后懽子女王号ス女御
昌子内親王
閑院大將朝光室姚子の母母の女登
女 花殿登子
有明親王
女 仁儀公室
女 兼道公室朝光の母
徽子女王
齋宮女御 母中將内侍所

六十二代第四
諱威明
母朱雀同
村上天皇
廣保四五廿五
日ふ崩御

弟十五
盛明親

弟十六中務
兼明親王

女四宮
康子 師輔公密
通後宮公
季公母

彈正宮
為尊親王 母同
長保四六月薨

廣平 母民部卿元方女

六十三代
冷泉院
寛弘八十廿四
日崩御十卷ふ
有

六十五代
花山院
寛弘六二八日
崩御四十一歳

六十七代
母藤家公の
女超子
三條院
寛仁元五九日
崩御と十三卷
ふ有

母皇后宮城子濟時
女式部卿廿五卷ふ
崩御
小一條院 敦明 中務
敦貞 母顯光公女
延子也

醍醐座主冷泉の五宮ふ成給
昭登 母中務御匣殿と号す

清仁

女 母中務八卷ふ
有五宮の宮

女 母若狭守資景女也中務ゥ女
のもらうらの兵部令婦
養奉る

女 六宮の宮

女 母同
女宮たち何も花山崩ロの時
ロ河のことくうせ給

師宮
敦道親王 母同
花山院のむこと
八卷ふ
五宮

六宮 右ュ同

女 宗子早世
母ハ花山
と同

円融院の女御母
尊子 同早世前
齋宮大宮と申

第三
兵部卿
母在衡女匹妃
致平親王
出家而岩倉ふ
住給

石藏式部卿
敦儀 母同
寛弘八十五日親
王天喜二七廿一
日薨五十八歳

中務 母同
敦平

某 因幡守

女 禎子ふ候世
四卷ふ有
敬子 齋宮

同日親王二品母同
師明
出家法名性信十
四卷ふ有仁和寺
濟信僧正御弟子

祇子 頼通公室

敦昌 母同

敦元 母御堂殿女
早世

敦賢 母頼宗公女
涼子 齋宮

侍後宰相
母顯光公女
基平

母頼良の女也女御熙
子ふ候実仁親
王の御母也
基子

兵衛佐中將と
廿八卷ュ有
行宗

備中守母瑠璃女御
下野守女
信宗

女 媞子候世
九卷ふ有

少將權中將宗吹也
廿八卷ュ有
季宗

女 母顯光公女

成信 母龍信公女
兼資のむこ也
三井寺
永圓

當子 母皇后宮娍子
父御門の時此宮ふ道雅参給由世ふ聞え有てミつから尼ふ成給九巻ふ有

女 母御堂殿女
催子 懐子
内親王 信家卿室

女 母瑠璃女御

女二 母同
禔子 教通公室

齊子 母同
齋院齋宮と廿九巻ふミゆ

女三 母同

一品宮陽明門院皇后宮母皇太后宮姸子道長公女後朱雀院后後三條御母

禎子
此後生給時天子ふりハかせつのハさる是初と也

第四
一品式部卿
為平親王 母安子

頼定 母高明公女
寛仁三六九日出家其年薨
源宰相兵衛督左衛門督

女 母顯光公女
三條院女御元子也

女 母同

第五
六十四代
圓融院 母同
正暦二二十二日ふ崩

左兵衛廿四巻ふ初てミゆ
大納言と廿五巻ふミゆ母同
憲定

女 母有國女
則理室

女 母同頼通公妻甚堂君隆姫子と云二人なゝ
ら頼通の室の取たて也廿四巻ふミゆ是を
頼通密通子いてきたり

後ふ實賢室と十六巻ふ有
但此女御の名つらひ人のこと
花山院女御 同母

中君 母同具平親王
北方也

前齋宮榮花齋宮の初と也廿三巻ふ式部卿宮の姫
恭子女王 君女御代と有頼通公の上の養女と有
但別人歟中姫君と有宇治関白尼上也

寛弘八六廿二日崩御
年三十一歳也
六十六代母東三條院の
一條院 懐仁 懐子

一品帥宮後ふ式部卿
敦康親王 母道隆公女
白ニ后宮定子
也寛仁二薨

中宮後朱雀后
嫄子 母具平親王女宇治殿の上の養
女長暦元九月謀子後九日メ薨

齋宮
嘉子 母則理女一説小一
條院の御女と也

六十八代
後一條院 母上東門院
長元九四十七日崩御 廿九歲

六十九代
後朱雀院 母同
寛徳二年正十八日崩御 廿七歲

一品一切經を〻文給治安四三月ふ出家廿一来ふ有母
脩子 定子

女二宮母同此宮産而定子薨此宮も九歲ふて薨
嬉子

後冷泉院 母嬉子御堂殿女此君産の後三日ふして薨
寛徳二四月ふ即位廿一歲ふて

七十代
章子 后也母中宮威子

中宮後三條后 母同 姫八齋院
馨子

七十一代母陽明門院
後三條院
延久五五七日崩御 四十歲

齋宮准三宮母同 長元九ト定
良子

齋院 母同同年ト 定後後房室
娟子

母中宮嬉子
祐子内親王

七十二代母茂子
白川院

一品 母同
聯子

樋口の齋宮と申 母同
俊子

今の齋院
佳子

七十三代
堀川院 母同 諱吉仁

齋宮 母道子
善子

敦文 母賢子四歲ふして薨 廿九四十巻ふ見ゆ

齋院八歲母同
謀子内親王 後の齋院母同
萬子

女子

後齋院 母延子
忠子内親王

若宮 母馨子 早世
禎子

第六早世也
富平 師尹公女芳子也

第七中務卿 母代明親王女北壮子
具平親王

初春宮權太夫也大政大臣母為平親王女長徳四二十
師房 七日薨七十歲卅九巻ふみゆ

女宮 母同 早世

女 頼通公室應德四卒九十二歲

中の宮敦康親王女 北の方

實仁 母基子應德二十八日ふ薨四十巻ふ有

輔仁 母同

男宮 母近江守実經女也此宮四五歲而早世

第八兵部卿
永平 母芳子 師尹公女也 愚鈍人

齋宮 敎通公再宮 資子入道一品の宮の養女まうす 宮と云廿一巻又
婚子

第九 母匹妃
貽平

女 母高光女公任女 宮上道兼公養

承子 母安子 早世

女 道信室

女二

女三
保子 母匹妃按察御息所也元方女也兼家公養給て卒

齋宮
規子 母齋宮女御徽子

左大臣
俊房 ―― 女 忠実公室

右大臣大將
顯房 ―― 賢子 中宮白川院の后母良頼女とし卅八歳ありて師実公養女 應德元九廿二日崩廿八歳

法性寺
仁覺

宰相中將
師忠

女 道房室

女 母御堂殿女敎通公養女師実公室

盛子 母計子廣幡中納言 庶明女顯光公室

樂子 母莊子

鞠子 母安子

女八

女 今姫君

入道一品宮
資子 母安子

号大齋院
選子 母同此宮産し給時崩ル 紫花物語齋院の始也

第八一品式部卿
母醍醐と同
教實親王
号六条宮と

仁和寺
寛朝僧正

三男土御門左大臣
従二位一条殿とも云
雅信 母時公女
正應四七廿九薨ス
七十歳餘

六条右大臣四卷ス
重信 左大臣と有り
長徳元薨

左大辨
某

三ノ
六男皇太后太夫 宮ノ
道方

四男源中納言藏
経長 人辨齋院
上宮

准三后 母穆子
倫子
御堂殿の上東門院等の
御母治安元二月ニ出家

六男左大辨琵琶
経信 引廿八卷ニ

中君 道綱宮兼経
生て母卒

女 宣旨寛子ニ
候廿六卷ニ

三君 致平親王
北方

女 母頼忠公女
隆家宮

辨少將
時通

中君也則理宮
大納言君但後ニハ
上東門院ニ候
女 御堂殿密通也

七男
時叙 母中納言朝忠女出家而大原
ニ住給萬壽元二月薨廿一卷

大納言治安四二月薨 六男源宰相
時中 朝任

扶義

丹波中將十三卷ニ薨
雅通

師良

後冷泉院
女 丹波乳母也

一男
経頼

廿卷上東門院住者歟
宣旨

仁和寺僧正
濟信

藤氏系図

- 文徳天皇御祖父太皇太后宮順子の父閑院左大臣贈太政大臣内麻呂三男
  - ○冬嗣
    - 皇太后高子父清和天皇の御祖父枇杷中納言贈太政大臣冬嗣一男
      - 長良
        - 太政大臣謚昭宣公皇后穏子朱雀村上二代の御祖父長良三男
          - 基経
            - 本院左大臣贈太政大臣基経一男母仁康親王女延喜九四四日薨年卅九歳
              - 時平
                - 枇杷左大臣基経二男母同天慶八薨七十一歳
                - 仲平
                - 役三位宮内卿同三男良親王女
                - 兼平 兵部卿忠
                - 八條大將時平公一男
                - 保忠
                - 中納言
                - 敦忠
                - 富小路右大臣母源昇女也
                - 顕忠
                - 敦忠のまごと栄花ホ有地下の人と見えたり
                - 相信
                - 枇杷大納言延光宮後閑院左大將朝光宮
                - 女
                - 岩倉
                - 文慶僧都
                - 栗田殿と同年ヨ薨
                - 相如
                - ひたすらとなけきし君を猶もなげくとふらし女なり
                - 女

太政大臣謚貞信公
忠平 同四男母康
天暦三八四日ホ薨七十歳除兼平而俗三平と云
仁親王女

醍醐の后
穩子 第四女皇 太后宮

小野宮太政大臣清慎
實頼 公母寛平御女
天禄元五十八日ホ薨
七十一歳

亭子院号永極
褒子 内侍所

女 実頼室

前坊御息所元輔

女 敦実親王北方

少將
敦敏 実頼一男 母時平公女

兵部卿
佐理 大貳也

女 十一卷ホミゆ

重輔

心譽僧都 三井寺

挟公俊都

実頼二男三条殿開白太政大臣廣義公
頼忠

萬壽三四四長谷於解脱寺出家六十一歳四條大納言四二位
公任

四條宮園融の后すバらの后と云
尊子 母同 寛仁元四月崩十二卷ホ

諟子 花山院の女御母同

女 為光公室 早世

四條中納言
定頼

女 教通公室 萬寿元正五日ホ 卒廿一卷ホミゆ

入圓 内供廿一卷 ホみゆ

登任

経季

経家 辨 廿六卷ホミゆ

信長公室中絶又信長公の女男侍從公室と廿六卷ホみゆ

女 郁芳門院の伯耆乳母と 廿九卷ホみゆ

参議右衛門督
齊敏 母同 敦方

女

村上女御
述子

女 重信公室

遵子養給て姫宮と云 藏人
中君 申 治安三三月卒十六 巻ふ
長宗

小野宮右大臣右大將
實資 東宮傅本北方 八為平親王女 永承元正十八日薨九十歳卅六巻ふ見ゆ
良圓 權少僧都

大宰大貳
高遠 母播磨守 尹文女
女 寛子ふ候十六巻ふみゆ
資頼 伯耆守

中納言左衛門督
懐平 母同
一男右衛門督
経通
女

高明公の息師中納言
女 經房室十六巻ふ 有
資平 皇太后宮權大夫 但禎子也大納言 實資公養子
資房 宰相頭中將

九條右大臣天德四五二日出家四日ふして薨五十
○ 師輔 二歳男十一人女六人 母源能有女

一條摂政太政大臣
伊尹 謙徳公 母経邦女

女 同人の室

前少將天延二ふもうさうして薨
舉賢 母惠子女王

侍從
尹相

経任 母佐理女 皇后宮權大夫宰相 中納言權大夫卅六 巻ふみゆ

女 大納言の君卅八巻ふ有

後少將
義孝 右ふ同薨 母同

正二位侍從大納言
行成 母保光女 道長公と同時薨五十六歳

但馬守後ふ近江守民部大輔
實経 十四巻ふみゆ 母泰清女

女 後三條院ふ候男宮うみし人也

入道中納言
義懷 宴後飯室ふ 住給発禪と 申母同

入道中將
成房

尾張權守
良経 母同

少將
行経 母實経の母の妹長家養子

賜皇后宮冷泉院の女御花山院の御母
懷子

女 定経室

堀川太政大臣准三后忠義公
兼通 母同
貞元二十八日薨五十三歲

女 為光公室

女 同前

四君 六條右大臣室

九御方 為尊親王北方室の後出家

飯室僧都 延圓 母同

阿闍梨 母同 文惠

信經 廿六卷ふ有但行經同人歟

女 母泰清女

中君 母同 近江守經賴室

三君 母行經と同長家室と 治安元年十五歲ふて十六卷ふ

堀川左大臣始号奏幡中納言治安元五廿五日薨年七十八歲 十六卷ふミゆ
顯光

出家 重家 母村上女五宮盛子也

○

准三后摂政三男東三條殿法興院大入道殿
兼家 母同

右衛門督 忠尹 母同

飯室權僧正 尋禪

僧正 深覺 東寺長者

三三男閑院左大將大納言母有明親王女
朝光 長徳元三廿日薨

右大將 道綱 或説二男寛仁四十十三日出家後卒

藤中納言 朝經

二男 基房

寛仁の乳母閑院大將の孫と廿八卷ふみゆ 女

小一條院女御中姫君とあり 延子 寛仁三四月ふ卒十六卷ふミゆ

一條院承香殿十六卷ふ尼後ふ源 元子 宰相賴定室出家の時尼ふ成

小宰相 兼經 母雅信公女 產畢則薨

右馬頭出家 登朝

左京大夫 某

中關白摂政内大臣藤中忘女 道隆 母

少將 某

小野三位
遠度

侍都
尋空

權少侍都
朝源

女 一條院姫宮
脩子の乳母

高光 入道少將

山井大納言大千代君 母山井永頼女
道頼

花山院女御
姚子

大納言君 母橘三位小一條院ふ也
女

頼通公妻子
産而薨

儀同三司小千代君 母高二位女高内侍也
寛弘七正廿九日薨卅七歳
伊周

侍都 母同
隆国

女 顯房室

中納言藏人少將従二位右衛門督と卅巻ふ
良頼

隆家

西三位松君也 母重光女
道雅
藏人少將八巻ふ同人とみゆ

某 母同

某 母同

内藏頭
頼親 外腹也

右大辨
経輔 孩子の中宮 亮と卅四巻ふあり

女 大姫君

中務大輔
周頼

某

女 小姫君

兵部卿
周家

女 母遠資女

一條院后皇后宮
定子 母高内侍 長保二十二十五日ふ崩す

女 兼経室

三條院齋景舍法
女御 少納言此女御ふ候 同母長保四八廿日卒
女御

宮内卿
遠重

女 昭平親王 北方

女 道兼公室後ニ顯光公室

村上后冷泉園聚の御母中宮 弘徽殿 應和四四廿九日ふ崩す
安子

女 道信妻

村上登花殿尚侍始
登子 八式部卿重明親王北方

三君 高明公室

藤三位繁子
四君 道兼公室

五君 高明公妻 母ハ高光と同

冷泉女御坊御座の
怨子 時冬給

敦道親王北方
三君 母同

一条院の御母殿
四君 母同

伊周の兄弟そろへの時ハ此君ろし寛弘元の時也
五君

三男粟田二条殿と也申
道兼 長徳元五二日関白 同八日薨

四男治部少輔
某

一男 ふくたり君

二位宰相左衛門督
兼隆 母遠重女

前頭中将
兼綱 寛イ

一条院御時くらべや
尊子 の女御 後ハ通任室

女 母遠重女二条殿の御方とて中宮威子ふ侍

左馬頭中宮權亮
兼房

女 敦平親王北方

女 母越後の辨

春宮の
典侍

九男一条殿法住寺殿大政大臣恒徳公
為光 四暦三六十六日薨

左衛門督母ハ敦敏女 誠信注理の妹まつ 誠信ともう君
三男大納言
齊信 母同 中宮部卿大夫民

女 長家室 萬寿二八廿九薨と 廿七巻ハ三ゆ

御堂関白摂政太政大臣号法成寺入道
○道長 萬寿四十二四薨六十二歳

冷泉院女御賜皇后宮
超子 三条院ハ母 天元五正月康申ふ 頓死

図書院后皇太后宮 一条院の母母ハ伊尹 守仲正女号東三条院
詮子 女御 長保三十二廿二日崩四十歳

字治殿さづ君と云
○頼道 母倫子

一条右大臣堀川と其始ハ春宮大夫と 廿一寒ふミゆ
顯宗 母高松上

宰相中将
兼頼

右大臣民部卿
俊家 永保二十六日薨六十四歳

二位中納言
宗俊

摂大納言右大将 四二位
道房 母寛子女

京極大殿
師實

姉君但馬守則理室
女子

四條宮後冷泉の后太皇太后宮
寛子

權中將道兼公養子
道信

法住寺僧都後ハ僧正
尋光

法住寺阿闍梨後ハ律師
良光

權大納言内藏頭
公信兵衛督
萬壽三四十五日ハ薨

實康母正光女

三條院御時麗景殿尚侍母國章女墓ハ御方頼定ハ名立し人
綏子

一條院御即位の時分
中宮宣旨
兼家の女と名乘いてし人

姸子ハ候給母墓の御方始東宮の
女御方
女匣殿

但馬守大納言と
基定母六巻ハ
三位

堀川中納言
能季

師兼

四君師通公室
女

小一条院の上母伊周女
大姫君

四位少將卅六巻ハ三位
基長

後朱雀女御麗景殿母同
延子

一條院一品脩子
養女

後三条女御
昭子

師實公妻始ハ上東門院ハ中納言君
女

某陵王舞し人

女齊時室

女母敦敏女
義懷室

花山院女御
弘徽殿
薇子母同
寛和元薨

三
女伊周公室し
んでんの上

大二條關白太政大臣
教通母倫子

後右馬入道佛のつけ上
ふり十九而出家
頼信母高松上
萬壽四五十四日ハ
卒廿九巻ハ有

中宮權大夫と廿二
能信巻ハみゆ
母同

内大臣始ハ春宮大
夫すまい君と云し也
道長室六十賀時落
尊舞し人
能長
実ハ頼宗公男
卅巻ハあり

白川院女御准三宮
道子

中納言
信家母公任女

二位侍從
通基母同

信基三十二巻
ハみゆ

太政大臣始山井大納言と云
信長

木幡權僧正
母ハ式部内侍
靜圓

花山院の後ハ中宮妍子
候入道殿御子産而失給
四君

五君 妍子ふ候
五の御方

十一男
公季 閑院太政大臣
仁義公

侍従宰相中納言右衛門督
實成

宰相
公成

長家

一條院の后上東門院
彰子 母倫子
太皇太后法名清淳覚萬寿三正十九日ふ出家承保元十二日崩す八十七歳

枇杷皇太后宮三條院
妍子 后 母同
萬寿四九十四日崩
廿九歳ふ有

大夫君母三位
男 よひまつ星ふ
失給もし欤

大納言始中納言
忠家 右衛門督

女 信長公養女

二位中將後宰相卅
某 六歳ふ

女 信長公宮

長谷法印
靜覚

後朱雀女御始御匣殿
笙子 母公任女
淮三宮梅壺弘徽殿出家

中君 久病

後冷泉女御
觀子 母公任女
小姫君

女 中納言資仲宮

女 頼宗公の室欤
長家の室欤

中君 頼基室世七歳
小卒

實季 卅八歳ふ
みゆ

成子也頼通公の
女 上の養子

公實 三十八歳ふ
みゆ

中宮後一条院后母同
威子 小姫君
長元九九二日出家
同六日崩す

後朱雀の賢花殿尚
後二條殿
嬉子 侍 母同
乙姫君
萬寿二八三日後冷泉
院を産し給て同廿日
薨十九歳此君の乳
母小式部也

師通
富家殿
忠實 智足院

中君 母同
師房公室
應德四七七日ふ卒

小一條院
院女御 母高松上

家忠 母頼國女

仁和寺
靜意

親賢

三昧僧都治安元薨
如源 十六歳より有

一條院弘徽殿女御
義子

三男
某 不審云々

四男大納言
天禄元七十四日小
師氏 薨五十五歳

中將
實方

経實 母基定女

○某 讃岐守

能實 母同

祇子 賜後二位 頼通公室皇后宮 寛子の母也

女御代 母同

○延光 枇杷大納言

女 濟時室 母敦忠の女也

三男
師尹 小一條左大臣
安和二年十五日薨五十歳

貴子

某 早世

濟時 小一條左大將賜太政大臣
母右大臣定方女

芳子 村上女御 宣耀殿御
髪長云々

二男正三位權中納言
通任 大藏卿
長暦三六廿七日小辛

○輔道

良基

○良頼

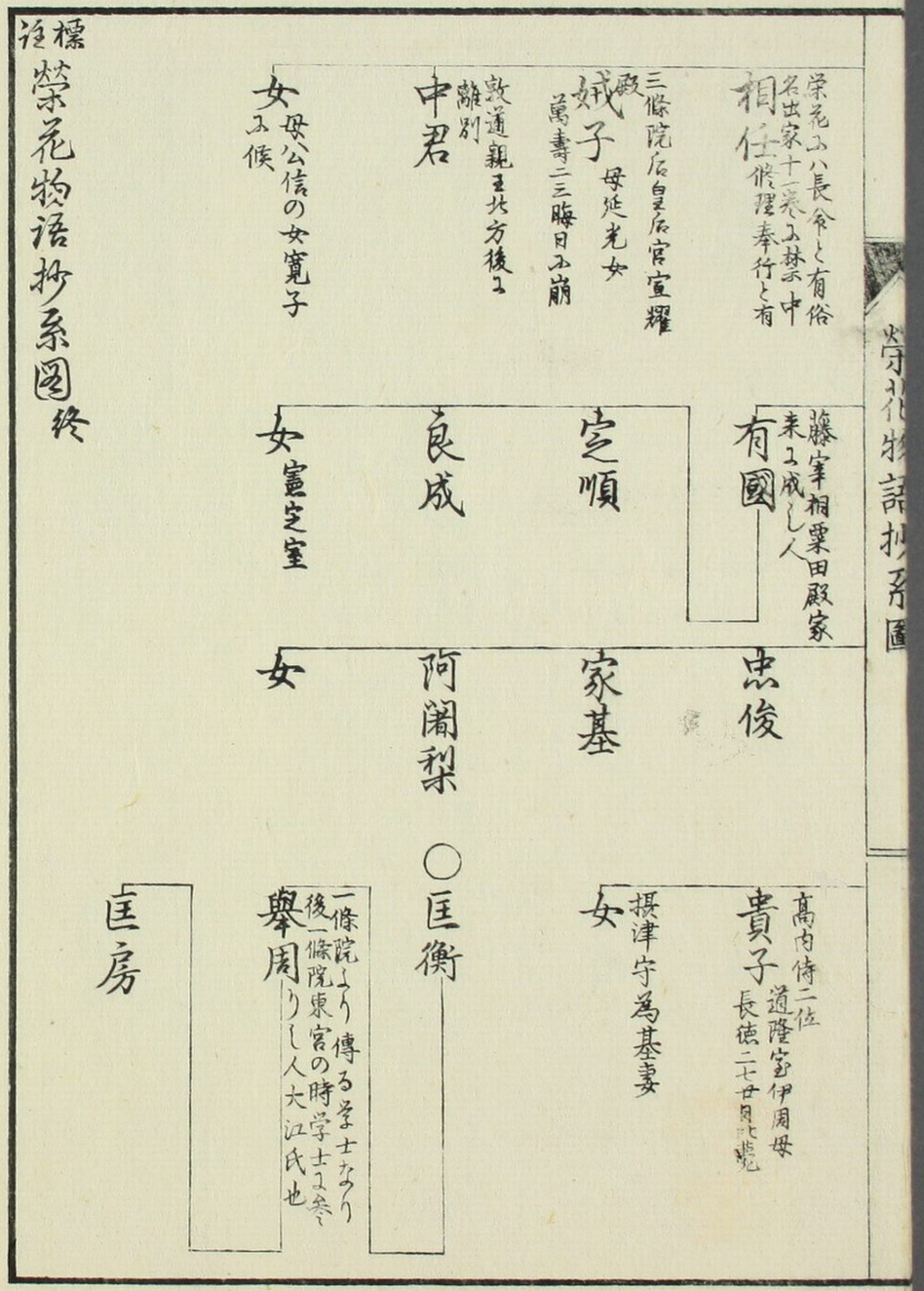
信順

阿閑梨
清昭

道順

明順

○成忠 高階二位



標注 榮花物語抄系圖終

明治廿四年八月三十日印刷
同　年九月二日發行
同　廿八年一月十五日再版

東京市本郷區西片町十番地
標注者　小中村義象

東京市本郷區森川町一番地
仝　關根正直

東京市神田區表神保町二番地
印刷兼發行者　渡邊兵吉

東京市神田區表神保町二番地
發行所　六合館書店

版權所有